

特集にあたって

相沢 伸広

二〇一一年、チュニジアのジャスミン革命に始まった政治的激動において、各国の長期独裁政権の崩壊が現実のものになると、指導者たちの亡命が噂されるようになった。チュニジアのベンアリは早々と亡命、リビアのカダフィ大佐は亡命の噂をかき消すのに躍起になった。同じように長期独裁政権が暴力をともなつて崩壊した例であつても、一九九八年、インドネシアのスハルト大統領のように、亡命するとは誰も考えなかつた例もある。

亡命するか否かの判断は、権力者の人生において、個人的に判断しなければならない最大の決断のひとつであろう。権力を失つたことを悟つたとき、権力の座にあつた指導者は次に何を失うのか考えるであろう。名誉を失い、資産を失い、自らの自由を失い、そして

命を失うかもしれない。権力の幕引きに失敗すれば、家族の政治的将来や命まで失うかもしれない恐怖とも戦う必要があるだろう。強権的な支配を行った指導者ほど、その恐怖も大きいのもかもしれない。なかには復活の道への淡い期待を持ちつつ、捲土重来を期すために戦略的に国外へ出る者もいるだろう。期待と不安が入り混じるなかで、亡命するべきか否か、どのタイミングで判断するのか、亡命するならば誰を、どこの国を頼りうるのか、といった問いに対し、指導者たちは極めて冷静に、瞬時に、そして個人的に判断する必要がある。

権力喪失過程における政治的判断は、権力獲得過程における判断と同様に、各国そして各時代の政治を理解する上で極めて示唆的である。権力獲得過程が、権力基盤

の足し算であるとするならば、権力喪失過程においてその運命を託す最後の命綱を探すプロセスは、権力基盤の引き算であるともいえる。最後に誰を頼つたのかが明らかになれば、各政治指導者が最終的にどのような国内の政治基盤をよりどころにしていたのか、また各国の指導者がどのような国際的な力において「生かされていた」のかを理解するヒントともなるだろう。

本特集では、そんな亡命した指導者たちの最後の決断の過程、そして権力喪失後に彼らが辿つた運命を紹介したい。数ある亡命指導者のなかの限られた事例ではあるが、なるべく異なるパターンを紹介したい。それらは、冷戦期に利害のある大国に連れ去られた、もしくは、救われた例（マルコス、シアヌーク）、植民地期に華僑の

ネットワークに救われた例（ナコンサワン親王、ダムロン親王）、独立後の権力争いのなか、亡命しては捲土重来を図つた例（ウヌー、プリディー）、独裁政権下で受けた寵愛を裏切り、亡命するも頓挫し処刑された例（カーミル）、政治活動の断念と引き換えに命と財産を守ることを許された例（ベン・アリ）、亡命してなお、権力維持に成功した例（タックシン）である。

現代において一国の権力の座は、米国や中国といったごく一部の大国を除けば、様々な国際関係のなかに埋め込まれている。もつとも、国同士の関係が、どのような形で指導者間の関係に翻訳され、指導者間の関係が国同士の関係をどのように規定するのかは個々の例をみるほかはない。具体的に誰が誰をどのように支えているのか、またなにより、指導者自身が主観的にはどの程度、誰を信用しているのかを知る局面は少ない。政治指導者の亡命という事件はそのことを垣間みることができ、数少ないチャンスでもある。

（あいざわ のぶひろ／アジア経済研究所 法・制度研究グループ）